
「個と集団の成長」……学校の役割

校長 小 西 信 輝

10月4日(日)、「南っ子学芸会」が開催されます。子どもたちは『心と心の バトンをつないで 感動とどけろ 南っ子』というテーマの達成を目指し、発表に向けて練習に励んでいるところです。

学芸会は、学校規模によって発表内容や規模など様々に変わります。かなり昔になりますが、私が初めて赴任した複式小規模校は児童数7名でした。子どもの出番が多く、舞踊劇、合奏、合唱、リズム運動、作文発表、あいさつ…と、子ども一人一人に多くの出番がありました。たくさん覚えることがある分、活躍の場がいくつもあります。(高学年担任だった私も、合奏の打楽器担当、舞踊劇では「北風」役と“活躍の場”？がありました。)

一方、永山南小学校くらいの規模になると児童数100名を超える学年がほとんどです。劇だと言、二言しか割り当たらない児童も多く、音楽発表の学年だと割り当たった楽器の演奏と歌、ダンス等が主なので、個人の出番というものは限られてきます。小規模校に比べると個人の出番が少ない分、保護者の満足度は上がらないのかもしれません。

そのかわり、大人数のよさもいろいろあります。声や音に迫力があります。人や楽器が多い分、深みが出てきます。全体の動き、統一感が学年の成長をはっきり示します。そういったよさは、大規模校でなければ味わえない、“ならでは”のよさです。

そして、そのような発表をするためには、個人のがんばりと集団のまとまりが要求されます。10人で合わせるのと、100人で合わせるのでは、かなりの違いがあるのです。個人では自分の役割を意識し自分のやるべき責任を果たすこと、集団ではそれぞれの力を結集するために集中し、他の人に合わせて動くことが必要になります。また、高学年の子どもたちには、舞台、照明、放送など全体を動かす係活動が加わります。

そこに取組の前とは違う成長の姿が表れます。小規模校には、そういった成長がないという意味ではありません。多く的人数で発表するまでには、たくさんの人とのかかわり、調整や意思の疎通、一定の規律の中での行動などが必要になります。その分、少人数の場合と比較すれば、伸びる力の質が違うのではないかと考えています。

個人のがんばりが基にあっての全体での発表です。そこにどれだけ力を入れて取り組むかによって、一人一人の満足度も変わります。例えうまくいかなくても、もそこに費やした思いや努力の分だけ、得るものがあるのです。目標をもち、それに向かって努力し、取組を振り返る。これは、他の行事でも学習でも、大きく言えば人の生き方にも通じます。

集団での発表で得られるものは、個人の満足感だけに終わりません。集団への所属感であったり、仲間意識であったり、自分の居場所づくりや他を思いやる心につながります。

個の成長とそれを基にした集団の成長。
そこに大きな学校の役割があると考えています。

ぜひ、当日は、子どもたちの取組の成果、成長の姿をご覧いただければと思います。

